幼小交流活動における子どもの意思の表出と遂行
――課題遂行と関係性維持と個人の参加欲求をめぐって――

○藤村ゆうみ・本山方子
奈良女子大学大学院人間文化研究科・奈良女子大学研究院

問題と目的

本研究は、幼小交流活動における年長児童の意思の遂行過程に着目し、幼小交流の活動内で、5歳児・1年生・2年生が、共通の目的と個人の欲求の間でどのようにかかわり合っているのかを明らかにすることを目的とした。

秋田(2002)は、小学生が園児とかかわる際には、「世話する者とされる者」という光景がよくみられるが、「小さい」「弱い」と考えられている側の有能さに小学生が気づいたり、あるいは、幼児が教える側となり関係の逆転が起きると、実践が両方の子ども達にとってより一層意味あるものになる、と主張している。

しかし、長期的に継続される幼小交流活動において、協同で制作にあたる年齢の近い児童と園児が、常にお互いを尊重し、配慮しあって活動を進めていくことができるのだろうか。単発のイベントとしての幼小連携では表れにくい児童と園児のかかわりが、恒常化された活動に見えてくるのではないだろうか。そこで、1年を通して幼小交流活動を行っている、関西の国立大学附属幼稚園と小学校を対象校とし、調査を行った。

方法

関西圏の国立大学附属幼稚園の5歳児1クラス(園児30名、担任1名)と、同国立大学附属小学校の1年生1クラス(児童39名、担任1名)、2年生1クラス(児童39名、担任1名)を調査協力者とした。2011年10月から12月まで、3学年合同の幼小交流活動の時間を対象に参与観察を行った。この活動では、3学年合同遠足の話題を発表するための制作が行われた。幼小交流場面以外に、1年生の朝の会や授業場面の観察も行い、許可を得て映像音声記録を採取した。その記録を逐語化して分析資料とし、分析対象となるエピソードを抽出して考察した。

結果と考察

調査の結果、児童と園児の関係は、純粋な相互援助のみから成り立っているわけではなく、5歳児、1年生、2年生それぞれが、それぞれの立場による葛藤を抱えながらも、チームとしての目標と自らの参加欲求を同時に満たすために、様々な交渉を行いながら、かかわりあっているということが示唆された。

児童達は、幼小交流活動を行っていく上で「活動内で作る作品の完成度を高くする」という目当てを持っており、これをとても重要なこととして彼らの中に位置づけていた。教師も、児童達のそうした意識を高めるような発話をしばしば行っていた。しかしまた、児童達は「5歳児も含む、チーム全員が活動に参加する」という目当ても教師から与えられており、それらに加え「自らが活躍したい」という欲求も持っていた。

特に、チーム(5歳児、1年生、2年生の3～4人からなる)のリーダーとしての役割を期待されている2年生には、上記に述べた2つの目当てを同時に満たすことが期待されていたが、それは時に困難であった。活動が成功するか否かは、彼らが5歳児をどう上手く活動に参加させるかにかかっていると言っても過言ではなく、彼らは時と場合に応じて、また5歳児の要求に応じて、可能な限り2つの目当てと自らの欲求を満たそうとしていた。

一方で5歳児は、チーム内において「世話をされる者」という役割を与えられていることが多く、それゆえ自分の能力に見合ったことを任せてもらえないといったことについて、たびたび葛藤や不満を抱えていた。しかし、その「役割」ゆえに「優遇」される時も少なからずあり、チームのリーダーである2年生に対して自己主張をし、その「役割」を利用する形で、チーム内での自らの立場を確立させていく様子が観察された。

1年生は、チーム内では、「世話をする者」「世話をされる者」といった既存の役割にとらわれにくい立場にあった。5歳児の様に「優遇」されることの少ない1年生は、2年生の指示に従うことを期待されていた。時にそれは彼らにとって窮屈なことであるようであったが、2年生の言明に従い、5歳児の世話をし、時には自らの活躍する場面についての自己主張もしつつ、チーム内での役割を確保していた。そうした1年生の活動への参加のし方の違いによって、チームのまとまりが異なる様子が観察された。

子ども達は活動に関して何かしらの欲求や要望がある際、単にそれを押し通すのではなかった。一見、相互に相手を配慮しているかのような言動で、事態を自らの都合に応じて操作しようとしていた。これは、優れた制作を行う「課題遂行」とチーム全員が参加する「関係性維持」という目的に加え、自分の活躍を含む「個人の参加欲求」がぶつかり合うチームの葛藤状況に対し、相互に折り合いを付けようとする行為であると言えるだろう。